

生涯教育総合センター研究紀要<研究コラム>

「すくすくコホート」鳥取研究グループの取り組み

—鍵となるのは「社会性」—

石田 開

科学技術振興機構社会技術研究開発センター／鳥取大学産官学連携研究員

「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明」(愛称「すくすくコホート」)は、社会技術研究開発センターが推進する発達コホート研究プロジェクトであり、その一部を受託研究として、鳥取大学のチームが担っている。この研究は、小児科学、発達心理学、神経科学、社会医学、統計学などの専門家が集い、日本の子どもの発達——特に社会性の——について調べ、それに寄与する社会的、物理的環境を解明しようという、一大学際プロジェクトである。現在、鳥取、三重、大阪のそれぞれ一部地域が調査対象となっており、そこで調査を遂行するグループおよび、それを支援するラボグループによりプロジェクトが構成されている。本稿では、鳥取大学を拠点とした鳥取研究グループ(注1)での研究活動の一部をご紹介しますとともに、その活動を取り巻く諸々の状況についても触れたい。

鳥取研究グループの研究活動

鳥取研究グループでは現在、就学前の幼児を主な対象として、調査を遂行中である。調査項目は、(1)保護者への質問紙項目(周産期の状況、子どもの行動評定、親の社会経済地位などの家庭環境にかかわる項目など)、(2)小児科医による観察(内容としては幼児の健診に準拠している)、(3)同年齢同性小集団での遊び場面の観察と多岐に渡る。昨年(平成17年度)5歳児100名あまりを募集、各協力児が5歳の誕生日を迎えるころに、保護者による質問紙への回答および観察室における協力児の観察を行った。その子どもたちが今年度(平成18年度)に6歳を迎えているわけだが、昨年度と同様の調査を同じ子どもたちに対して行っている。加えて今年度、6歳児の一部に対しては、本プロジェクトの神経科学的側面を代表するものとして、MRI(核磁気共鳴画像)装置を用いた脳各部位の形態・容積測定も行っている。本稿ではその中で、(3)遊びの観察について、これまでに見られていることを簡単にご紹介したい。

遊び場面の観察は、同性同年齢の4人の子どもとそれぞれの保護者とを集めて行われる(注2)。観察場面は、最初保護者(多くは母親)と子ども同室で、開始後早々に保護者は退室する。遊びは約40分間であり、その時間の大半で、成人女性(保育士あるいはそれに準ずる者)が遊びを教示する。遊びは、保護者と子どもによる身体的遊び、絵本の読み聞かせ、日本の伝承遊び(「あぶくたった」)、キャンディの配分および、それらの間に挿入される子どもだけの自由場面などからなる。(遊び場面の設定と5歳児における結果については、石田ら(2006)参照。)

これらの遊び場面観察(特に「あぶくたった」場面での子どもの振る舞い)から見てきたことは、社会性の下位要素として、先導的あるいは主役的に振舞える能力と集団の中で他の子どもと同調する能力という2つが重要であること、また、遊びに対して子どもが楽しさを感じるには、同調的経験だけではなく、主役的先導的経験が必要であるということである。前者は、他の文化における先行研究(たとえばRydell, Hagekull, and Bohlin, 1997)とも合致するもの

で、今後、この2つの要素を測るのにより適した遊び場面の設定が望まれる。一方後者の観点は、こどもにとって「主役となれる場面」が大切であることを示唆しており、この研究が保育や教育の場面に対して提言できる可能性を示している。前者の観点と共に、今後より精査していくつもりである。

ところで本研究で用いている観察室には、観察場面での子ども達の様子をとらえるビデオカメラが設置されていると共に、赤外線式のモーションキャプチャシステムが導入されている。このシステムでは、特殊な装置が発した赤外線を反射するマーカーを子どもに装着させることにより、観察室内での子どもの位置を常に記録することができる。このシステムは稼働し始めたばかりであるが、今後このシステムを用いて、統計学など他グループの専門家との連携のもと、子どもが遊び観察場面で示す「社会性」の一部を切り出すことを考えている。もちろんシステムがとらえられるのは、子どもたちが観察時間内の各時点でとった位置（およびそこから計算される移動速度や移動運動量）であり、直接に子どもの社会性を示すものではない。しかし、通常は人の目にその測定を頼ることの多い「社会性」の、少なくとも一部の側面について、「冷たい機械の目」で測定し、それを人間による評定と付き合わせることで、ときとして「いい加減な」（しかし血の通った）人の目に客観的、量的な根拠を与えることができるのではないかと考えている。

プロジェクトおよび地域との連携

以上のような鳥取研究グループの活動は全て、「すくすくコホート」プロジェクトの一部として行われており、プロジェクトを構成する他のグループおよび社会技術研究開発センターとの連携のもと遂行される。上述のように、構成メンバーは実に様々な分野の専門家であり、その関心は常に一致するものではない。その中でも、限られた資源（協力者に対して許容される負担、研究者等の人的資源および研究予算という経済的資源）を最大限生かすべく、各専門家が努力しているところである。調査項目が、質問紙、小児科医による観察、心理的な行動観察など、多岐にわたっているのも関心の多様性ゆえであり、これは少なからず協力者への負担となるが、しかし様々な視点による資料収集が、子ども達の全体像を描き出すことに役立つであろう。

また、この研究が、地域で多くの協力者を募り、安心して継続的に協力いただくという性格を有している以上、その遂行にはプロジェクト内ではもちろん、地域社会の協力が不可欠となる。実際、鳥取研究グループでは、「鳥取子ども懇話会」を組織して、地域行政、医療、教育保育、大学の担当者、専門家に集まっていただき、協力者の募集（昨年度の5歳児の募集は、主に地域の保育園、幼稚園を通じて行った）や研究の広報を目的とした「子どもフォーラム」開催などに対して、多くのご協力をいただいている。グループを代表してここに感謝する次第である。とはいえこの場合もやはり、協力する側の関心を満たす側面が必要なことはもちろんであり、たとえば「子どもフォーラム」は、研究広報にとどまらず、地域における子育て支援に関する情報発信の場ともなっている。（同様の活動は、三重と大阪においても行われている。）

以上のように、地域で調査にあたる研究グループ、そのグループを擁するプロジェクト、および調査遂行を支える地域の3者それぞれが、それぞれの関心を持って研究に関わっている。幼児における社会性の軸として先に2点挙げたが、研究遂行に関わる大人の側も、3者それぞれが、それぞれの目的を追求しながら（つまりある場面で主役になって先導しながら）も、子

どもを中心とした社会の福祉を共通目標として協調する（他者と同調する）ことが、この研究の成功には不可欠であろう。それを思えば、子どもの社会性を測るなどとは何とも大それた話ではあり、身の引き締まる思いである。

注1 鳥取研究グループは、グループリーダーの小枝達也（鳥取大学地域学部地域教育学科）以下、田丸敏高・寺川志奈子・関あゆみ（以上、鳥取大学地域学部地域教育学科）・小林勝年（鳥取大学生涯教育総合センター）、石田開、竹内亜理子（鳥取大学地域学部）、植木綾子（倉吉総合看護専門学校）の研究メンバーと、そのほか研究補助に関わる人員で構成されている。

注2 4人組での遊び場面観察は、誕生日の近い同性の子どもを観察室に集めて行われる。幼児なので当然保護者同伴での来室となる。協力者の約半数は、保護者もしくは子ども自身の多忙のため、観察日程の都合がつかず1組だけでの来室となり、小集団での観察をあきらめた。

引用文献

石田 開・石上令子・植木綾子・竹内亜理子・小林勝年・寺川志奈子・田丸敏高・小枝達也（2006）. 保育的観察による5歳幼児のピア関係形成に関する研究－その測定についての予備的研究. 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）, 2, 353-366.

Rydell, A.M., Hagekull, B., & Bohlin, G. (1997). Measurement of two social competence aspects in middle childhood. *Developmental Psychology*, 33, 824-833.